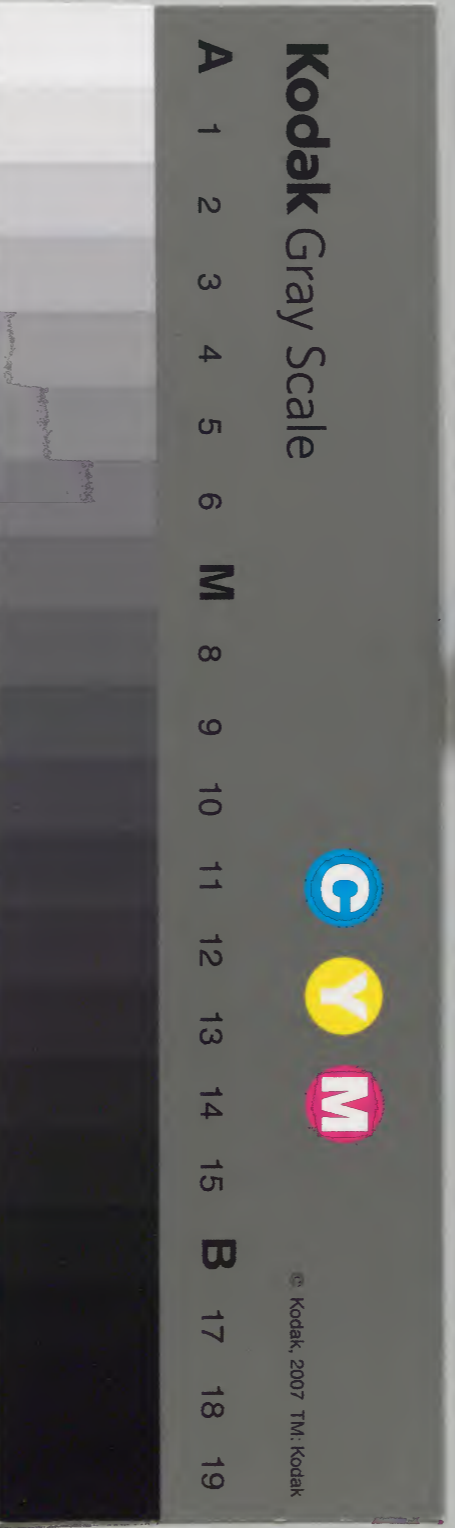




内閣文庫	
番 號	和 33604
冊 數	6 (1)
函 號	169 80

和
三三六〇四
五丹

169-80



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

史記
卷六



序

田中島五戰記者何。甲越兩公之

紀事也。紀事者，史之變也。記以紀

事。有_レ其事。故有_レ其記也。無_レ其事。

必_レ無_レ其記也。今其記有事。事則在

以中島故。右之曰田中島五戰記。

紀事。易為謂之史之變也。大史遺

田中島五戰記

田中島

其籍宗國墜其微。是以史變而紀
事。之學興焉。所謂記一方郡國之
事。故謂之紀事。行長氏之平家
物語。僧玄惠之太平記。皆紀事也。
今夫分符竹。賜茅土。則一方民之
至也。而其成敗得失。訓戒約束。決
大事。定大議。與指麾號令。遺風

餘烈。非有紀事。則安得傳稱於
後。分兩公。是各一方民之主。而一世
之雄也。而其本事。亦在于川中
島。若夫不生今日之世界。而生二
百年以前之世界。則不知有
兩公之英雄。又不知有川中島之
偉事。已不知有之。又何紀事之

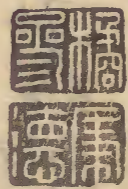
有前有記之者。又有錄之者。未
 足悉於兩公之事。村上抱卿
 生清門之家。世為信濃之人。川
 中、島之役。皆出於其祖先羽
 林公之身事。是以善悉兩公之
 本事。即念家臣出浦氏記其
 事。其記莫偉於出浦氏之記。

其事莫偉於川中島之事。記
 與事已偉矣。取已偉之記而閱
 已偉之事。則生今日之世界。而
 讀二百年以前之紀事者。也。
 善讀之。則胷中作一部之
 太平記。君其問諸村上君。以為
 然乎否。時庚申之冬。五。第。三。百。

夜雨潇然。篝火課訖。

後瀨龜田賴之識

橋本書



甲越五戰記改正序

余少讀歷史，尋古今成敗之
蹟，每聽越公之遺風餘烈，未
嘗不躍然而喜，慨然而歎焉。
其所以喜之者，公之用武於川
中島，目中已無甲，談笑拉十萬
之衆，甲人不敢再飲馬於犀川。
其英邁豈非可喜哉！其所以

歎之者，術術貪祿之後，巧其
言，沒其實，而作之書，以貴已。
流況如甲陽軍鑑，嫁名於高
坂氏，川中島之五戰，皆與羸，而甲
其誣英雄，欺後世者，不尠矣。
其寃埋，豈非可嘆哉！夫戎馬
駑驄之間，所貴者，非才也，氣也。
斯氣也，能讀書萬卷，而善然也。

古有崑棲洞巢之士，而抱輔世
長民之手段者，一時應帝王之
聘，顧出佐天子，號令賞罰，施
諸明堂，一法每出，為天下萬世
之憲典，而其人平日所讀者，果
何書乎？未有書之可讀，則地
上一篇，只為王者師。然則讀
書萬卷，倉卒之間，不得使斯

氣何貴多哉是以天生斯人
則亦假斯氣而千古或一人
而已

皇朝應仁之末足利氏失其政羣
雄輩出魁士蜂簇而天以斯
氣獨與越公一人而已矣越公
少長登筮間讀書名暇而西
越敵國入於京師東涉八州謁

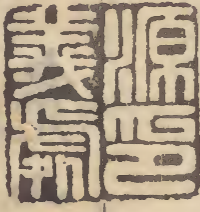
於鎌倉十萬馬蹄蹴北條氏之
城池一介義言挫織田氏之頭角
而其區畫排置出於時輩君羊
雄之上則是非善使斯氣者耶
嗚呼越公之英氣偉績實足為
百世用兵之鑑矣曰令家臣出
浦清命錄公之用武之本事
始末并余先君羽林公之軍事

始於戶石之役，終於川中嶋五戰，名曰甲越五戰考正。合為五卷，即命劉氏公之於世，而諸書所載，乖舛謬妄之說，悉皆芟剔。其立論引証，按之地，審照之家譜，以質其謬。庶幾後世與余同志者，曰：此書以談古今成敗得失之蹟，而見越公之

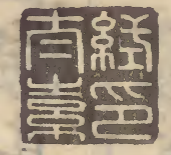
遺風餘烈，則亦不為名小補也。然則清命之有功斯書，非可小視者也。云爾。

寬政庚申之冬仲

更級少將村上左衛門佐八世孫源義處謹識於荏土駿臺之寓居



見山織太素書



Faded vertical text in the right column, likely bleed-through from the reverse side of the page.

甲越み哉考正

目次

卷の一

摺編

卷の二

武田信玄を率して信州小諸の城を圍む村上羽林とておしとて是を援けし信玄と我ひ大よそ軍を攻る
武田信玄石の城を拔て軍を常回小移す村上羽林とてを怒てをわして再信玄と我ひ村上羽林大軍をわして武田信玄と上田永義

甲越五軍託正

我軍より攻めしむる所、利が居城に入りて是
と保羽林より小越の通に長尾道徳信を師とす

卷の二

長尾道徳信村上羽林の兵を率て師して信州
小越の羽林もまゝとて武田信玄の
兵を率て小越の城を攻めしむる
長尾道徳信村上羽林お供を率て武田信
玄と川中流小越の城を攻めしむる

卷の三

長尾道徳信村上羽林お供を率て師して攻めしむる

戸神より武田信玄と川中流小越の
長尾道徳信村上羽林相供を率て武田信玄
と川中流小越の

卷の四

上杉謙信と洛して將軍家小越の城を攻めしむる
を揚りしむる

上杉謙信を率て武田信玄の城を攻めしむる
を揚りしむる

武田信玄を率て川中流より村上家の陣
場と敵軍の城を攻めしむる

上杉謙信を帥して関東の諸城と接し
上杉謙信大軍を率いて小原氏原が居城小原
系をうらむ

武田信玄を率いて海津の城に入ると
隙の村と家の高き等と害し

上杉謙信村と羽林父子お供大軍を引陳
營と妻女守は設け武田信玄は川中流に戦ふ
足利大樹書と上杉謙信は福ふ

上杉謙信村と羽林父子を率いて武田信玄
と川中流にお供ひは物と約してよふとたむ

附言

一一の巻、甲陽の記の巻代は觀覽の巻と
そと武田信玄妻多くを流傳ふも又
因てそと刪りて是を疾して以て家人
の惑と解るゝと歎け

一二の巻、つらふ、平が音若村と羽林や名と回
系あまの夜美小越の謙信は援えとてその
又武田信玄皆人秀不の遠去傳流は戦
古後伝ふ謙信の戦記は原さ又つらふ古
場よりその方角と等してそと回記

是と覺歎に成よと人ノ流る不の邊出傳統よ
くつてその是非と相衰一深まる不の備安と安ん
固ておよ甲場軍艦の況と奉てり遠へるを正す
そ紀よ曰て又およ三月のりたるに甲場の大軍は
派より海路の也と殺入て戸名の城をりこむ
城をる大よとらさるるさけしと又級所多
村上羽林を信よこれと情ア云一万を率て
戸名の城を搦ふ城をるこれ力とゆて並らよ城
つと兵甲場のほ軍に討或一夾み將して忽との圍
やが甲場の玄潔と殺入て、いも利のいして

大よ流るるのありは之隊のね井利海路の傳
と始してその外寔る人の勇と殺多感死に村上の
え海額定る入道字を核よ新して競ひをんて
甲場の中軍よあつてよとて甲場の玄大の勢怖
して漸くへし漸と失て士卒皆死ををく下り
伝言が先急好七は一奉よつてんとは甲場の後軍
山本道定後角を後と進とてその云又百斗よ
て密よ回轉して村上勢と南面よりし甲場の
玄ををんて大いよ多をゆるお戦村と勢絶
小利のいして殺をい伝言を氣不命頻よ

下知して是と遊ひ首を擗ると二百六十余級村
上気は遠く波濤は行去大いなりなりこんてその
翌年天又十六年のつさ八月まで大軍と戦て
戸名の田を放火一遂よ上回来よ入る村上気は太
よ燃ていふ余と率して行去とありお戦ひ
忽ち甲場の之隊と破る氣はも亦つらつて
高は活戦するものと我十余合け時よつらつ
甲場の諸隊大い驚き放を以氣は頻よ率と
先は去よ向て果よ又とす甲場の氣はと
て行去と助て氣はとお戦氣はのをまよと

又十邊計の池かきとを擗て山と通く甲場の氣は
よ新て中へくしとを擗るとも多し
おおく村上の軍道よ放は氣は中よ然後よ奔り
長尾系虎入は通は後る勢て氣は通はよと
曰く公の陣と傳り行去が頭と斬て河原と
んとして通く通はして曰き公は言が為よ地と
よ通りよ擗るとも多し時よつらつてよと
いふ士の為とするよつらつてよと
おおく通は敷子跡とて行去よ通く海原平
よはよつらつてよとよとよとよとよとよとよと

申治よお討ひるもの敷家よ及へり此もあはれ
 りに云々... 後永禄元年九月と於徳信村よ...
 一万余と余と率して... 武田信玄...
 武田信玄と... 海津の城を...
 一万余と... 密に... 行中...
 出法... 討... 九月

十日の... 及んで... 甲場の...
 甲場の... 武田...
 武田... 海津...
 一万余... 密に...
 出法... 討... 九月

然る人ありれば又市が備するふとせよ
ありて款なりまは討する及ぶる感をも
のありれば毎十ら及ぶる今やじととる
すしてその校概とのべ竊は強とく
ふ然りし一も市をより福小のそ
はよまてて学回をい且そ性類業にて
教養と毎どざれば又詳のよまて得り
もつともあつらん然もばりとのそ
亦たく違ひのらん然もばりとのそ
して眼耳杳冥ふやのうへは後もまこ

勢しぬまは同志の君子明ぬらん事
と庶成する而こ

追か

上田系より 葛尾より二里
川中流より 八里

葛尾より 小越より 山より 約 二十里

芋川より 山より 約 十二里余

材と相林上田系の軍破まで芋川の城
入る七十余日ふまを保ち相林自ら小越
へ通る長尾漁村に援を乞ふ
川中流より 山より 約 二十里

